主人公で読む G. チョーサー『トロイルスとクリセイデ』

柴　田　良　孝

は　じ　め　に

G. チョーサーの長編物語詩『トロイルスとクリセイデ』は，古典時代のトロイア戦争を背景にしながら，トロイアの王子トロイルスと美貌の未亡人クリセイデが展開する愛と戦争が絡んだ中世の宮廷ロマンスである。

どんな言語でも，また，近代の小説家のいろいろな試みにおいても，これほど完全に均整の取れた構成を持つ物語はないし，これほど適切な叙述法を見出す物語はない。あるいは，このように高い芸術的価値を持つ長詩は，それ以後の 600 年間には英語では見られなかった。*Beowulf*（8c.）や J. Milton の *Paradise Lost*（1667 年）の壮麗さや華美さは持たないにしても，イギリスの narrative poetry のこれら最高峰と同列に挙げ得るほどの独自のすぐれた諸点を持っている，などと評されているチョーサーの代表作である。

そして，この作品の最大の問題点は，最終巻において，世間を離れ天上の至福に達したトロイルスが，自分の死を悼んでいる人々が泣き悲しんでいるのを見て「笑う」のであるが，この「笑い（cosmic laugh）」とはいかなる意味を持っているのか，である。

本講座では，この作品解釈の最大の問題について，一つの私見を導くというよりは，諸説を提示して，聴衆の皆様がこの問題をどうとらえるかの糸口を提供したいと考えている。

I.　トロイルス版の，そしてクリセイデ版の『トロイルスとクリセイデ』

まず，本講座のテーマに則り，チョーサーが二人の主人公，トロイルスとクリセイデにどんな性格を与えそしてどんな役割を期待したのかを明確にするために, この物語から二人の主人公を抜き出して, それぞれにスポットを当て，物語を読み直してみたいと思う。なぜならこのことによって，この物語の最大の問題の解決の道筋をより明らかにできると考えるからである。

(1)　トロイルス版『トロイルスとクリセイデ』

トロイルスについて，語り手は，終始，恋には奥手ながらも「若くて，溌溂として，強く，ライオンのように勇敢であり，真実であることは揺るぎなく，現在はおろか未来永劫，この世が続く限り，最高の資質を授けられた人物の一人だった」と描いている。この人物像をもとに，トロイルスを中心に物語を再構築すれば以下のようであろう。

トロイアの若い王子，恋には無垢なトロイルスは，クリセイデと呼ばれる若い美貌の未亡人に恋慕する。友人であり，クリセイデの叔父であるパンダルスの強い助力を得て，トロイルスは，自らの愛を何とか打ち明ける。漸く彼の愛が受け入れられる。一方，ギリシャ軍に逃亡していたクリセイデの父は，ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは，クリセイデに，逃げようと懇願するが，クリセイデはこれを受け入れず，10 日後には必ず戻るからと約束しギリシャの陣営に行くが，これを破ってディオメーデと呼ばれるギリシャ人と暮らすことになる。トロイルスは，失望し，間もなく戦いで命を落とす。

この物語の再構築から次のようなトロイルスのキャラクター，役割などが明らかになる。トロイルスは，恋に落ちた若者の常のように，遠慮がちで，押しの強くない人物であり，ひたすら誠実にクリセイダに仕えようとしたのである。しかし，クリセイデは，その誠実に真剣に対応しようとしなかった。トロイルスの誠実，クリセイデの気まぐれ，不実という構図が明らかになる。

(2)　クリセイデ版『トロイルスとクリセイデ』

次いで，クリセイデを中心に物語を再構築すれば次のようになろう。

若い未亡人のクリセイデは，トロイルスという名の若い王子に愛される。トロイルスと叔父パンダルスが結託したしつこい勧めによって，クリセイデは，自らの体面を気にしながらも結局，トロイルスを受け入れる。一方以前にギリシャ側に逃亡していたクリセイデの父は，ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは一緒に逃げることを懇願するが，クリセイデは，必ず戻ってくると約束して，すでに捕虜になっていたトロイアのアンテノールと交換される。ギリシャ陣営に行ってしまうと，クリセイデは，トロイルスのところに戻る気はあるもののそれが無理だと悟り，ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れ，ともに暮らすことになる。結局，トロイルスは，失望し，間もなく戦いで殺される。そして，その後，クリセイデがどうなったか，我々（読者）には分からない。

この物語の再構築から次のようなクリセイデのキャラクター，役割などが明らかになる。すなわち，叔父の執拗な勧めによって，愛を受け入れ，自分とは関係ない捕虜交換によって，その愛は引き裂かれ，戻ってくると約束はしたものの，それが無理と悟り，ディオメーデという名のギリシャ

人の求愛を受け入れざるを得ないことになる。確かに，移り気といわれても，不実と言われても，裏切り者といわれてもやむを得ない面が際立ってくる。

しかし，さらには，自分の意思ではどうにもならない，女の弱い立場ではどうにもならない状況に，あるいは運命に翻弄される姿をも読み取ることができよう。

二人の再構築によって，一方では，誠実な，他方では，不実な，あるいは運命に翻弄されるという対照的なそれぞれの姿を見ることができよう。この物語の最終局面では，誠実な前者は死後天国へ，不実な後者は，行方知れず，となるのである。

II.　典拠，語り手，宮廷風恋愛，運命論

中世英文学を理解するにあたって，特に注意しなければならない中世英文学ならでの事柄がある。その代表的なものを，諸家の説を取りまとめながら確認しておく。

(1)　典拠

チョーサーの，あるいはその時代の文学作品には，今日のいわゆる独創性を尊ぶものとは異なり，より古い時代の作品，伝説，民話，あるいは歴史的事実などに依拠しながら，それにどのように反応して作品を構成するかという作者の創作態度があった。

『トロイルスとクリセイデ』に関わって，チョーサーが最も依拠したのは，同年代人のイタリアのボッカッチオ（あるいは，ボッカチオ）（Giovanni Boccaccio）の『恋のとりこ』（*Il Filostrato*，Filostrato は，“the man overcome and struck down by love” を意味する。）である。もちろん，ボッカッ

チオも，この作品をより古い作品に依拠しながら生み出している。トロイルスとクリセイデという二人の原型となる恋愛については，12 世紀の末頃にフランスのベヌワ・ドゥ・サン・モール（Benoit de Sainte-Maure）がアングロ・ノルマン語で書いた『トロイ物語』（*Le Roman de Troie*）に依拠し，また，いわゆるトロイの物語に関して普及伝播した知識という点では，13 世紀末のイタリアのシシリー人ギドー（Guido delle Colonne）のラテン語散文『トロイ物語』（*Historia Trojana*）に基づいたと言われている。

チョーサーは，トロイルスとクリセイデ，そしてパンダルスがからむ恋愛物語のあらすじを，ボッカッチオの『恋のとりこ』（全行で 5,704 行，八部構成）に依拠している。チョーサーは，『恋のとりこ』の全 5,704 行から，2,730 行を使い，それを 2,583 行に圧縮して取り入れている。これはチョーサーの全行の約 3 分の 1 である。『恋のとりこ』の八部構成もチョーサーでは五部の構成に仕立て直されている。『恋のとりこ』八部の内四部がトロイルスの悶々とした情の叙述に充てられていて，特にクリセイデがトロイアへ出立した後の叙述には，全編の半分ほども割かれている。一方チョーサーは，Book V の初めにクリセイデのトロイア出立を述べ，全編の 5 分の 3 余りは，トロイラスの求愛と愛の歓喜の叙述に当てている。

すなわち，チョーサーでは，トロイルスのクリセイデに対する求愛，愛の歓喜，失恋の悲哀などが等しく描かれていると言える。これは，取りも直さず，チョーサーの関心の所在を明示しているものであろう。

以上が大きな異同であるが，詳しい異同については，ここでは省略する。

(2)　語り手

チョーサーの時代，詩人（語り手）は，聴衆を前に，読んで聞かせていたのである。チョーサーの聴衆には，高位の貴族やその婦人，高僧など，

上流階の人々がいた。ケンブリッジ大学のコーパス・クリスティ・コレッジにある写本の『トロイルスとクリセイデ』の口絵には，貴族や貴婦人たちが集まった宮廷で，詩を読んでいる風景が色彩豊かに描かれている。この口絵の中心で，読み聞かせているのは，この作品の作家チョーサーで，聴衆の中には，18 歳だったリチャード王（1385 年当時），その妻アン王妃も含まれていると言われている。実際，チョーサーは，各 Book の前口上（prologue），結び口上，また物語の最中において，聴衆に語りかけている。詩が作者自身によって，口誦される場合，印刷された作品よりも，聴衆の身分や，その時の聴衆の様子を意識したりして，ある程度柔軟に作品を構成する可能性がある，ということである。

Book I の冒頭で「トロイアの王プリアモスの息子トロイルスの二重の sorrow（不幸，悲しみ，）をお話しすることが，私の目的。」と，語り手はこの物語を始める。次いで，語り手は，自らを “God of Loves servantz”（〈愛の神〉の召使たち）に仕えるものとして，恋愛に係わっては，自分は単なる召使，随伴者（Book I, ll. 15-21）であると控えめな態度で話を進めていく。

また，Book II でも，「ラテン語のものから自国語に直して……原作者の語るままに語るのだから」（Book II, ll. 12-21）と述べ，Book I と同じく，物語る内容とは，深く関わろうとしない，控えめな，あるいは距離を置いた態度で語ることを強調している。

しかしながら，トロイルスとクリセイデの恋が成就することになる Book III では，語り手の態度は一変する。クリセイデの愛の成就を語る力を与えられるように神に強く祈願し，愛の成就に向けて深く関わろうとする（Book III, ll. 43-49）のである。語り手自身の強い思いが投影されている。

しかし，二人の愛が破局する Book IV の prologue（ll. 43-49）で，語り手は，語るべきことにおののきながらも，クリセイデがトロイルスをどう

して捨てたのか，クリセイデの不実の理由を明かさなければならない，それがこの本の主題であり，その真実を明かすことが自分の役割であると述べるのである。Book II までの少しく距離感を取りながら語る語り手の態度とは全く異なっている。

語り手は，Book I，Book II を語るとき，物語る内容とは深く関わろうとしない，控えめな，あるいは距離を置いた態度で語ることを強調している。Book III においては，二人の愛の成就に深く関わろうとする態度になる。そして Book IV 以降では，クリセイデの不実の理由を明かさねばならないとの態度に変化している。

このような変化は，何を意味するのか。これは，正に語り手の，あるいはチョーサーの二人の愛への本格的なコミットメント，すなわち，いったん成就した二人の愛が，なぜ破局したか，その理由を語り手が，すなわちチョーサーが問い詰めようとしているのである。

このような態度の変化は，詩が作者自身によって口誦される場合，印刷された作品よりも，聴衆の身分や，その時の聴衆の様子を意識して，ある程度柔軟に作品を構成する可能性がある，ということに起因している。トロイルスの誠実に対してクリセイデの不実, 心変わりを, 宮廷の聴衆に語ってきた。そこには女王はじめ，上流の婦人もたくさん聞いている。宮廷風恋愛の作法に則りながら語られる二人の愛が，クリセイデの，すなわち女性の不実だけが語られては，聴衆は収まらない。不実の理由について何らかの回答が必要であったという語り手の姿が伺えるのではないか。

(3)　宮廷風恋愛

いわゆる恋愛を扱っている中世英文学の作品は，この時代特有の愛の作法に則って描かれているのである。すなわち『トロイルスとクリセイデ』

において，トロイア戦争の最中に展開する古代人のトロイルスとクリセイデは，中世の特殊な恋愛作法，当時流行した宮廷風恋愛（Courtly Love）の作法に則っているのである。

宮廷風恋愛の作法とはいかなるものか。それは，中世時代の創造ではない。ローマの詩人オウィディウス（Ovidius）の『愛の技法』（*Ars Amatoria*）に遡ると言われている。これは，男性には求愛のテクニークを，女性には誘惑の方法を戯画的に授けるものであった。中世のような封建時代の社会のように，女性の地位が男子への隷属においてのみ存在していた時代，男女の平等の権利を前提として相互の自発的な意思による愛というものは考えられなかった。このような状況の中，彼が推奨した作法は「意中の婦人に対して，絶対服従で，万難を排して貫く」ことであったが，それが，なぜ十一世紀末の宮廷を遍歴する吟遊詩人の吟唱の中に姿を現すに至ったかは詳らかになってはいない。ともあれ，この作法が中世の宮廷に行われた中世文学において，しばしば主題として選ばれたのであった。

さらに，この恋愛の作法は，特にアンドレ礼拝堂付き司祭アンドレアス・カペラヌス（Andreas Capellanus）によって，『誠実な愛し方の技術』（*De Arte Homeste Amandi*）（13 世紀初頭 ?）において集大成され，恋人たちへの手引書として，一般に受け入れられるに至った。道徳的な規範にもとる恋愛関係については，あらゆる時代に存在したかもしれないが，中世時代の上流階級の間では結婚を決める種々の条件があったため，そしてその条件の中に，関係する相手の気持ちがほとんど考慮されなかったため，特に結婚外のいわゆる不倫を促したのであった。宮廷風恋愛はそのようなことをよしとした。

カペラヌスの教義によれば，恋人の求愛を拒絶するための女性側の言い訳として，結婚していることは抗弁にならなかった。事実，夫と妻の間の

愛はありえないと考えられていたので，結婚することが恋人たちの目指す目標ではなかった。また，未亡人は恋人が注目する対象として，既婚の女性と同様望ましいものであった。その教義では真に恋人はどのように振舞うべきか，どのように感情表現すべきかについて，色々規定している。

チョーサーの時代までには，宮廷風恋愛の詳細は単なる文学的伝統様式にすぎなくなってしまったが，トロイルス，クリセイデ，そして彼らの仲介者パンダルスという登場人物の態度と振る舞いは，この恋愛の作法に則ったやり方であり，それに則って愛を演じているのである，ことに注意を払わねばならない。

トロイルスは, 宮廷風恋愛の恋人の典型である。戦場では武勇において，ヘクトールに次ぐけれども, 恋愛では臆病である。時には自暴自棄になる。パンダルスの強引とも思える導きがなければ，クリセイデに直接自分の心情を吐露することもできない。クリセイデに恋するまでは愛をあざ笑い，恋に落ちた友を愚弄していた。とにかくトロイルスは宮廷風恋愛の作法を体現しているのである。それは，クリセイデと深い関係を持ったにもかかわらず，その後もトロイアの王子である身分にもかかわらず彼女に絶対服従を尽くそうとするところにも表れている。

一方，クリセイデがトロイルスの愛を受け入れることを躊躇する点も，宮廷風恋愛の作法に則っている。この躊躇が，未亡人だからか，外聞を気にするせいか，女性の本能としてそう簡単に愛を受け入れられないと見せようとしたのか, あるいは別の事情によるものかは分からない。ともあれ，クリセイデがトロイルスの抱擁を受け入れたこと，それは宮廷風恋愛の規範では罪悪ではない。

クリセイデの行動を，宮廷風恋愛の規範に照らして見れば，彼女が責められるべきことは，一度誓った愛を不実にもディオメーデのために裏切っ

た点にある，と言えるのではないだろうか。

(4) 運命論

運命論についても，当時の特徴的な考え方があった。その中心にあったのは，ボエシウス（Boethius）の『哲学の慰め』（*De Consolatione Philosophinae*）で，チョーサーはこれを『ボーエス』（*Boece*）として，『トロイルスとクリセイデ』と同じ頃か，少し後に中英語の散文に訳している。

さて，トロイルスとクリセイデ二人の幸福な，そして密やかな愛の生活は長くは続かない。クリセイデが，ギリシャ軍の捕虜になっているトロイア軍のアンテノールと交換されることになり，トロイルスの心は打ちひしがれる。パンダルスも駆けつけ，運命の女神を責める（Book IV, ll. 386-392）が，トロイルスは苦悩する。『「生じるべき事はすべて必ずや生じるのだから。こうして滅ぶのも，俺の運命なのだ。」「すべてのものは運命によって生じるのだ。」』（Book IV, ll. 960-966）と語りながら，人間にどれだけ自分の運命を決める自由が残されているのかという点で自問自答することになる。これは，Book IV の l. 1082 まで，長々と続く。この部分は，ボエシウス（Boethius）の『哲学の慰め』（*De Consolatione Philosophinae*）（第5章2以下）を引き写したものである，と言われている。

トロイルスは，この自問自答のなかで，クリセイデとの別れが定められた運命なら，むしろ死なせてくれ，とユーピテル（ジュピター）に祈るのである。つまり，二人の別れは，運命の所為であると述べ，自由意志へのこだわりを取り下げているのである。

ところで，中世紀において運命論だけが優勢であったのではなく，アリストテレス，プラトンなどのギリシャ哲学の信念をひき，キリスト教の洗礼を受けた自由意志説が聖アウグスティヌス，ボエティウスには伝わって

いた。ボエティウスは，人間の自由意志と神の予知との対立を調節しようとして，現世の幸福は空虚にして真の幸福は徳と善行のうちにあることを唱え，神に似た人間がその判断の利器である理性を極度に働かせ，地上的なものから逃避することなく，これと果敢に戦ってこそ始めて神に参与し得ると，主張していた。

しかし，チョーサーは，自由意志論は採用せずに悲観的な運命論だけを，トロイルスに言わしめている。チョーサーは，トロイルスの自問自答の独白の中で，二人の別離は「運命」の所為と言わしめているのでる。

III.　笑い（Cosmic Laugh）

典拠，特に『恋のとりこ』との比較によって，語り手，すなわちチョーサーは，トロイラスの求愛と愛の歓喜を強調して語っていたことが分かった［II. (1)］。また聴衆を前にした語り手の語り口は，二人の恋愛模様について，最初は，控えめな態度であったが，途中から二人の別れの原因をしっかりと突き止めなければならいと真剣な態度に変化した［II. (2)］。二人の愛は，宮廷風恋愛の規範に則っていたのだが，その規範から外れたのはクリセイデのディオメーデへの心変りであった［II. (3)］。トロイルスは二人の別れの原因は運命の所為であると，自らを納得させている［II. (4)］。以上が，前章 II において明らかになったことである。

さて，愛する二人は生き別れ，約束の 10 日を過ぎてもクリセイデは戻らない。そうしているうちにトロイルスは，兄のデイフェーブスが敵将ディオメーデから奪った陣羽織に，別れの日に自分がクリセイデに与えたブローチが附いているのを見つける。クリセイデの裏切りの証を見た彼は絶望し，戦場に死を求めて戦い続ける。ディオメーデに報復の一矢を報いるどころか，遂に敵将アキレウスの手にかかって，その若い命は果てる。そ

して，死後，トロイルスの魂は昇天し，第八天にまで上り，星や天界の音楽に囲まれて，極めて小さい一点の地球を見下す。今や世間を離れ天上の至福に達し，自分の死を悼んでいる人々が泣き悲しんでいるのを見て笑う（cosmic laugh）のである（Book V, ll. 1807-1827）。

この「笑い」とは，この物語にとって一体どんな意味があるのか。これが，この作品の解釈に当たっての最大の問題である。

ところで，この Book V, ll. 1807-1827 の 3 連の部分は，ボッカッチオの別の作品『イル・テセイダ』（*Il Teseida delle nozze d'Emelia*《*The Story of Teseus Concerning the Nuptials of Emily*》，『テセウス一族の物語』）の第十一章一節から三節に対応していて，Teseida lines とも呼ばれているが，チョーサーはほとんど，この『イル・テセイダ』に依拠している。先に述べたように，ボッカッチオの『恋のとりこ』やボエシウス（Boethius）の『哲学の慰め』を典拠としていたように，チョーサーは，ここでは『イル・テセイダ』に依拠しているが，ここでの典拠との相違は，『イル・テセイダ』の主人公アーサイトの笑いが，トロイルスの「笑」いに置き換えられたところのみのようである。

ところで，前章 I の（1）で，トロイルスを物語の中心に据えて，物語を再構築したが，そこでは次のような物語が成立した。

「トロイアの若い王子，恋には無垢なトロイルスは，クリセイデと呼ばれる若い美貌の未亡人に恋慕する。友人であり，クリセイデの叔父であるパンダルスの強い助力を得て，トロイルスは，自らの愛を何とか打ち明ける。漸く彼の愛が受け入れられる。一方，ギリシャ軍に逃亡していたクリセイデの父は，ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは，クリセイデに，逃げようと懇願するが，クリセイデはこれを受け入れ

ず，10 日後には必ず戻るからと約束しギリシャの陣営に行くがこれを破って，ディオメーデと呼ばれるギリシャ人と暮らすことになる。トロイルスは，失望し，間もなく戦いで命を落とす。」

このような物語の最後に，トロイルスの「笑い」を置いてみると，次のようになろう。トロイルスは，恋に落ちた若者の常のように，遠慮がちで，押しの強くない人物であり，ひたすら誠実にそして，宮廷風恋愛の作法に従い，クリセイダを至上の人として仕えようとした［cf. II. (1)］。しかし，クリセイデは，その誠実に真剣に対応しようとしなかった。一度誓った愛を不実にもディオメーデのために裏切った［cf. II. (3)］。クリセイデの気まぐれ，不実ののちに誠実なトロイルスは落命する。そして魂は昇天し，天上から『……最後に自分の殺されたところを見下した。／彼は自分の死に大声をあげて泣く人々の／悲しみを見て即座に笑』ったのである。そして『……心をすべて天に向けるべき時に，／永続しない盲目的欲望を／必死に追い求めるわれらの一切の行動を責めて……』，第八天のさらに彼方にあるメリクリウスが彼に割り当てた住処へと旅立った』のである。つまり，ここでの『笑い』は，誠実に，クリセイダに全身全霊をもって仕えた自分に対し，現世における若さの失敗，恋人にそむかれた身の不甲斐なさを，運命論ですべてを運命の所為にした［cf. II. (4)］にも関わらず，さらなる不幸（クリセイデがディオメーデの愛を受け入れて裏切ったこと。）に見舞われた，という自嘲する自己批判の皮肉な笑い，と理解されようか。

あるいは，次のように解釈されようか。すなわち，誠実に己の愛を全うしながらも，現世における若さの失敗，恋人にそむかれた身の不甲斐なさを，すべて運命の所為にしたのにも関わらず，さらなる不幸が見舞った。とはいえ，自分の魂は天上に向かった。天上の至福との対比において，世俗的幸福の一切は偽りである。徳，最高善，神を真の幸福と説く『ボーエ

ス』の境地へと到達した。そして，『ボーエス』の哲学からキリスト教の不変の愛へと向かった。大声をあげて泣く人々を見て，いずれ，キリスト教の不変の愛へと向かうという，過去の何物にも煩わされない，こだわりを乗り越えて笑ったのである。

また，クリセイデ版『トロイルスとクリセイデ』では次のような物語が再構築された。

「若い未亡人のクリセイデは，トロイルスという名の若い王子に愛される。トロイルスと叔父パンダルスが結託したしつこい勧めによって，クリセイデは，自らの体面を気にしながら結局，トロイルスを恋人として受け入れる。一方以前にギリシャ側に逃亡していたクリセイデの父は，ギリシャ陣営に娘を呼び寄せることを願う。クリセイデはトロイアのアンテノールと交換されることが取り決められる。トロイルスは一緒に逃げることを懇願するが，クリセイデは，必ず戻ってくると約束して，すでに捕虜になっていたトロイアのアンテノールと交換される。ギリシャ陣営に行ってしまうと，クリセイデは，トロイルスのところに戻る気はあるもののそれが無理だと悟り，ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れ，ともに暮らすことになる。結局，トロイルスは，失望し，間もなく戦いで殺される。そして，その後，クリセイデがどうなったか，我々（読者）には分からない。」

このような物語の後に，トロイルスの「笑い」を置いてみると次のようになろうか。叔父のしつこい勧めによって，愛を受け入れ［cf. II. (1)］，自分とは関係ない捕虜交換によって，引き裂かれ，戻ってくると約束はしたものの，それが無理と悟り，ディオメーデという名のギリシャ人の求愛を受け入れざるを得ないことになったクリセイデ［cf. II. (3)］。トロイルスは，失望し［cf. II. (4)］，間もなく戦いで殺される。クリセイデにとっ

ては，如何ともし難い，万やむを得ない成り行きである。しかしながら，トロイルスの魂は昇天し，天上から『……最後に自分の殺されたところを見下した。／彼は自分の死に大声をあげて泣く人々』の中にクリセイデの姿も見たのかもしれない。そして，……悲しみを見て……笑』ったのである。不実な，如何ともし難い，万やむを得ない成り行きに身を任せたクリセイデは，多分この地上で大声をあげて泣く人々の中にいるのだ。それ見たことかとトロイルスは非難を込めてクリセイデを笑った，と解釈できようか。

あるいは，魂が天上に昇ることによって，すなわち，肉体の枠を離れることによって，苦しみが失せた。霊的な明視力を得たトロイルスの魂はここにおいて，事態の本質をつかんだ。クリセイデの裏切りを必然的に導いた彼女の弱い性格，その複雑（ある意味，浅薄）な心情をはじめて悟ったのである。それは女性の持つ本質でもある。そのような性格に振り回されて苦しんだ自分自身の浅薄さを笑った，と解釈できようか。

終　わ　り　に

トロイルス版とクリセイデ版のそれぞれの物語をもとにして，「笑い」の意味の解釈を示してみたが，最後に，この二つをまとめた解釈を示さなければならないであろう。

語り手としてのチョーサーは，この物語を語るにあたって，最初はある種控えめに，しかし，クリセイデがトロイルスを捨てる段になってからは，その原因も探りたい，と語りの態度を一変させる［II.（2）］。その原因を語り手は，クリセイデの眉がくっついている（“……hire browes joyneden yfeefe”, Book V, l. 813）ためとか，クリセイデの，あるいは広い意味では女のもつ優柔不断の性格（“……slydyng of corage”, Book V, l. 825）のため，

などとも言ってはいるが，それが真の原因の答ではない。語り手は，誠実なトロイルスが不実なクリセイデに対し天上からから浴びせた「笑い」によって，二人の間に均衡を取った。二人に対し種々の思いを持つ貴紳淑女の聴衆に対する配慮があったのかもしれない。取り敢えず均衡を保った上で，Chaucer は，「笑い」の意味を，あるいは二人の別れの最終的原因追及を，聴衆に，あるいは読者に委ねたとは考えられないだろうか。

本講座では,『トロイルスとクリセイデ』の解釈上の最大の問題について，あえてトロイルス版とクリセイデ版とに物語を再構築しながら，諸家の見解を踏まえていくつかの解釈の例示を試みたが，本日の聴衆の皆様の解釈の参考になれば幸いである。

参　考　文　献

テキスト
L. D. Benson, *The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Oxford : Oxford Univ. press, 1987
R. K. Gordon, *The Story of Troilus*, Toronto : Univ. of Toronto Press, 1978

以下については，日本語の文献・翻訳のみを上げておく。一つ一つ明示しなかったが，日本語訳を含めこれらの文献からも，直接，間接の引用などもしたので，感謝を込めてあげておく。
［翻訳］
刈田元司譯『G. チョーサー　戀のとりこ』 東京：新月社，昭和 23 年
宮田武志譯『ジェフリー・チョーサー　トゥローイラスとクリセイデ』 西宮：大手前女子学園アングロノルマン研究所，昭和 54 年
宮田武志譯『ジェフリー・チョーサー　善女よもやま話』 西宮：大手前女子学園アングロノルマン研究所，昭和 57 年
笹本長敬訳『トロイルスとクリセイデ　付・アネリダとアルシーテ』 東京：英宝社，2012 年
アンドレアス・カペルラヌス著　野島　秀勝訳 『宮廷風恋愛の技術』（叢書・ウニベルシタス　297）東京：法政大学出版局，1990
アンドレーアース・カペルラーヌス　瀬谷幸男訳 『宮廷風恋愛について　ヨーロッパ中世の恋愛指南書』東京：南雲堂，1993
ボエティウス　渡辺義雄訳 『哲学の慰め』（筑摩叢書　139）東京：筑摩書房，1969

ボエティウス　畠中尚志訳　『ボエティウス・哲学の慰め』東京：岩波書店，1938
［研究書］
上野直蔵　*The Religious View of Chaucer in his Italian Period*, 東京：南雲堂，1959
上野直蔵　『チョーサアの「トロイラス」論』　東京：南雲堂，1972
桝井廸夫　『チョーサー研究』東京：研究社　昭和 37 年
吉田新吾　『チョーサー研究』京都：アポロン社，昭和 39 年
繁尾　久　『中世英文学点描』東京：伸光社，1982
繁尾　久他　『チョーサーとキリスト教』東京：学書房，昭和 59 年